



かけはし

平成29年11月 1日

ふるさと智恵文に誇りをもつ輝く智小っ子を「地域ぐるみ」で育てましょう

八夕(周囲の人)をラク(楽)にする「働く」

校長 川崎直人

最近「働き方改革」が話題になり、働き方について様々な場面で論議されていますが、今月の23日は「勤労感謝の日」です。この日は、勤労を尊び、お米などの生産を祝い、国民が互いに感謝し合うという趣旨で昭和23年に制定されました。



以前は「新嘗祭」(にいなめさい)といって、宮中や各地の神社で、その年に採れた新しい穀物を供え、生産の喜びを祝う祝日でした。収穫の喜びと同時に、生産に携わった人々の苦労や努力こそ尊いものであるから、働く人々への感謝と元気で働けることの喜びを併せて祝い合う日になったのです。

私たちが安心して、不自由なく生活できるのは、社会全体で多くの人が働いて、生活に必要な物を生産してくれているからです。大地震や大災害などのとき、全国各地から様々な生活物資が運ばれてきます。そのときに現地の人たちは、生産に携わった人々の努力の尊さ、供給してくれたことへの感謝の気持ちをもつことでしょう。

このような経験がないと、労働の尊さ、感謝などを肌で感じることはできないのでしょうか。いや違います。目を家庭という身近なものに移してみると、家庭の中には「家事の分担」という立派な仕事があります。買い物、風呂掃除、洗濯、調理などなど数え切れないたくさんの仕事があります。各家庭、様々な状況があると思いますが、家事の分担は、ある意味家族の一員としての義務といえます。そこで親からの「ありがとう」「お風呂気持ちよかったよ」、子供からの「夕飯美味しかったよ」などの言葉で自然とお互いに感謝の気持ちが湧いてくるのではないのでしょうか。

八夕(周囲の人)をラク(楽)にするから「働く」という言葉をきっかけに、家事の分担や責任、働くことの意義などについてご家庭で話し合ってみてください。

労働ということを身近なものとしてとらえ、まずは家族、そして学校、地域へと目を向け、働くことに労を惜しまない子供たちになってほしいと願っています。